

# 東アジアの鉛釉陶器の 意義と陶磁史上の位置づけ

西アジアとの比較において

The Significance and Evaluation of East Asian Lead-glazed Pottery  
in the History of Chinese Ceramics: in Comparison with West Asia

## 弓場紀知

はじめに

①東アジアの鉛釉陶器

②鉛釉陶器の陶磁史上の位置づけ

### 【論文要旨】

彩釉陶器の誕生は西アジアにおいて始まった。紀元前10世紀ごろの宮殿のタイル装飾に彩釉陶器が用いられたのが最初である。初期はアルカリ釉を媒溶材として用いているが、アケメネス朝ペルシア、ローマ時代には鉛釉が媒溶材として用いられ緑釉陶器や褐釉陶器がつくられた。

漢代の鉛釉陶器はローマ時代の鉛釉陶器と技術的に共通しており、東西両世界での技術交流の可能性をうかがわせる。中国では北朝時代、山西・河北の鮮卑族の墳墓の副葬品に緑釉、黄釉、白釉、緑彩などの鉛釉陶器がある。この時期の鮮卑族の王墓からはササン・ペルシア製の金銀器やガラス器が出土しており、鉛釉陶器も西方の文物の流入に影響を受けて発達したものと考えられる。唐三彩は従来は8世紀前半、盛唐期に発達した彩釉陶器とされていたが、その萌芽は北朝後期にある。日本では白鳳期の寺院址や祭祀遺跡、墓から唐三彩が出土している。中国では唐三彩は墓葬用の明器として用いられたが、日本では貴重な文物として受け入れられ、その模造品として奈良三彩が製作された。

唐三彩は8世紀中葉を期にその製作はとだえる。9世紀の三彩陶器は盛唐期の三彩とは質を異にする新しい彩釉陶器である。唐三彩は墓葬用明器であったが、9世紀の三彩陶器は実用器である。この時期の三彩陶器の製作をうながしたのは西アジアのイスラム世界との交易である。中国揚州唐城とイラクのサーマッラー遺跡で同じ白釉緑彩陶器が出土しており、これは単に東方の鉛釉陶器がイスラム圏に輸出されたのではなく、イスラム圏の嗜好を中国側が受け入れて作りだした新しい彩釉陶器である。中国の彩釉陶器の誕生とその発達には常に西アジアとの交流の中で考えるべきであり、陶磁器における東西交流の重要な示標なのである。